ジュニアライターがゆく

戦争や核兵器のない平和な社会を築こうと頑張っている若者がいます。国際舞台で意見を発表したり、平和イベントを開いたり…。積極的に行動する姿は周りの共感を呼び、時に世界を動かす力になります。中国新聞ジュニアライターの中高生は、広島とつながりながら各地で「草の根」の活動を続ける人たちを取材。進学したり社会人になったりしてからも、平和をめぐる問題に関心を持ち続けることの大切さを学びました。

「草の根」活動 若者の活躍

政治に関わる権利 私たちにも

ユース担当国連事務総長特使
ジャヤトマ・ウィクラマナヤケさん

「若者は皆さんの想像以上に影響力を持っている」とジュニアライターに語り掛けるウィクラマナヤケさん

外務省の招きで2月中旬に来日したユース担当国連事務総長特使のジャヤトマ・ウィクラマナヤケさん(29)に、話を聞きました。

特使の役割は、若者に市民や政治活動への参加を促し、支援することだそうです。アントニオ・グテレス事務総長に若者の視点から助言したり、国際会議で紛争や貧困で苦しむ子どもたちの現状を訴えたりしています。

私たちは「平和のためになぜ若者が積極的に行動する必要があるのか」と尋ねました。ウィクラマナヤケさんは、世界人口の約半数が30歳以下で、10～24歳が約18億人いるという統計を教えてくれました。「若者は市民や政治活動に関わる権利がある。自ら声を上げて意見を反映させてほしい」と話しました。

紛争経験し行動 政策立案も

母国スリランカで19年間も民族紛争の下で暮らした経験が、行動を起こしたきっかけでした。教育の機会を奪われることなく平和な環境で暮らすにはどうしたらいいのか、考えたそうです。学生時代にはスリランカ政府の政策づくりに携わりました。

「ヒロシマの歴史を踏まえながら、戦争と荒廃に戻らないよう世界のリーダーに問うてほしい」というウィクラマナヤケさんの言葉が心に響きました。未来を生きるのは私たち若い世代です。平和な社会を築くための選択を大人任せにせず、自分の意見を持って行動していこうと思います。

ウェブサイトで動画も見れます

カクワカ広島・慶応大1年 高橋悠太さん

核政策 有権者へ情報発信

テレビ電話で画面の中の高橋さんに質問するジュニアライター

慶応大法学部1年の高橋悠太さん(19)は、盈進中高（福山市）のヒューマンライツ部で核兵器廃絶や人権問題に取り組みました。大学に進学してからも、広島とのつながりを持ちながら平和活動に力を入れています。今回、東京と広島をテレビ電話でつなぎました。

広島選出の国会議員に直接会って核兵器問題に対する考えを聞く「核政策を知りたい広島若者有権者の会（カクワカ広島）」を昨年1月に設立しました。共同代表として、選挙で有権者の意思決定に役立つような情報を発信しています。

今年2月には、ノーベル平和賞を受賞した市民団体「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）のパリフォーラムに参加。フランスで各国の同世代と意見を交わし「草の根活動の大切さをあらためて学んだ」と振り返りました。

広島を外から見たいと思い、県外の大学に進学した高橋さん。東京で友人に核問題に対する考えを話すと「意識が高いね」と言われて会話が終わることが多いそうです。そこで自分の思いを伝えるだけでなく「対話」を心掛けて、相手が関心を持っていることも共有しているといいます。

高橋さんは「人との出会いやつながりを絶やさずに、できる範囲で一緒に平和を発信し続けよう」と呼び掛けました。

ナガサキ・ユース代表団

被爆者の思い 継承し世界へ

核兵器廃絶を目指す大学生たちの活動について話すナガサキ・ユース代表団のメンバーたち

被爆地長崎で、大学生たちが平和活動に取り組んでいます。「ナガサキ・ユース代表団」の8期生7人が研修旅行で広島を訪れた2月に取材しました。

原爆被害や核軍縮について勉強会を続けています。目標は、ニューヨークの国連本部で開かれる核拡散防止条約（NPT）再検討会議です。長崎県、長崎市、長崎大でつくる協議会の派遣団として、現地でイベントを開く準備を進めてきました。

テーマは「人類みなヒバクシャである」。原発や核兵器が存在する現代に生きる誰もが被害者になり得る、という意味です。長崎大2年の岩高史織さん(20)は「被爆3世として被爆者から受け継いだ思いを発信したい」と話します。長崎大4年の川村和輝さん(22)は、核保有国の米国に住んだ経験から、核問題に関心を持つようになったそうです。

メンバーの「現在の問題を考える時、歴史にも目を向けよう」という言葉が印象的でした。原爆について意見の違う人と語り合う時に大切なことだと思いました。

この取材の後、新型コロナウイルスの感染が広がりました。4月27日からの再検討会議は延期だそうです。長崎県立大2年の谷口萌乃香さん(20)に電話すると「残念ですが、イベントの内容をさらに高めて違う機会に発表したり、小中学校での『平和出前授業』を開いたりする活動を続けます」と話していました。どんな状況でも頑張ろう、という思いが伝わってきました。若い世代の発言と行動が、平和のバトンになって手渡されていきます。

私たちが担当しました　今回の取材は、高3川岸言統、鬼頭里歩、高2及川陽香、斉藤幸歩、目黒美貴、フィリックス・ウォルシュ、中3岡島由奈、桂一葉が担当しました。

取材を通して感じたことを中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイトで読むことができます。